



風景の句読点

Punctuation of Scene

第3回

① 家屋の全周に築かれた石垣

株式会社オリエンタルコンサルタンツ/関東支店/都市政策デザイン部

金野 拓朗 KONNO Takuro (会誌編集専門委員)

外泊

石垣の里
(愛媛県愛南町)

斜面に築かれた漁村集落

高知県との境界に位置する愛媛県愛南町の中心部までは、松山から車で2時間ほど。外泊は、そこから西海半島沿いに30分ほどの漁村集落である。

今では「石垣の里」と呼ばれるこの集落は、斜面を切り開いて築かれたものであり、海へ開けている北方以外は山地に囲まれている。風や波の音がよく聞こえる50戸ほどの静かな集落であり、実際に斜面上の家屋と海との間で会話する家族がいるほどである。「遠見の窓」と呼ばれる、海や船の様子を確認するためのくぼみが石垣に設けられている家屋もあり、集落建設時から海との密接な関係性があったことがうかがえる。

「風景の句読点」は、私たちの心に句読点を打ち、思わず足を止めたいような素晴らしい風景について、その成り立ちや魅力の源泉を紹介するコーナーです。



② 海に開いた斜面にある集落

住民手作りの石垣

集落の風景の大きな特徴は石垣で、これは台風や冬の季節風である「しまき」を防ぐものであり、各家屋の全周に築かれている。この石垣は、いつ、どのように築かれたのであろうか。

そもそも外泊の集落は、東隣に位置する中泊集落の人口増加に伴う、分家移住政策により構築されたものである。分家自体は幕末の構想で、50戸ほどの家族が選定されたのち、各戸で石垣の構築に取り掛かり、全戸が入居したのは明治12(1879)年頃であった。石材は隣接する山地から豊富に産出し、材料調達に困ることはなかったようである。専門的な石工が当時この地域に存在しなかったため乱積みの石垣であるが、これまで外泊では大きな地震に見舞われていないことも幸いし、現在まで残存している。最も高い石垣は、当時17歳であった七蔵が積んだ「七蔵垣」で、高さ7mほどである。

産業の変遷と変わらない風景

明治～昭和中期まで、外泊集落の産業は、漁業と斜面に築いた段々畑での芋の栽培といった第1次産業が中心であった。昭和30(1955)年頃からは観光振興に伴い産業構造が変化し、第3次産業の割合が増加するにつれて、段々畑の必要性の低下や維持管理の人手が不足したことで、現在ではそのほとんどが山林化している。しかし段々畑の痕跡は集落周辺の斜面に残っており、いかに厳しい土地条件の中で生活を営んでいたかがわかる。

昭和50(1975)年頃には伝統的建造物群保存調査が行われたが、地域住民の意向もあって、現在も保存地区には指定されていない。建築技術の進歩に伴い2階建ての家屋が増え、石垣はコンクリートブロックで一部代替し、通路には安全対策のために柵が設置された。しかしそのような変化は、風景の大半を占める圧倒的な石積みの前では些細なことに見える。外泊の風景からは、今もなお過酷な自然・土地条件の中で生きていこうとした先人の労力や思いを感じることができる。

<参考文献>

- 1) 「愛媛県西海町外泊石垣集落伝統的建造物群保存調査報告書」1975. 西海町教育委員会
- 2) 「外泊の石垣集落: 集落景観の保全と再生 (観光資源調査報告: vol.6)」1978.3 観光資源保護財団編

<取材協力>

- 1) 石垣の里 だんだん館
- 2) 愛媛県愛南町役場商工観光課

<写真提供>

- ①: 愛媛県愛南町役場商工観光課
- ②: 筆者